図書館だより No.5

令和７年９月号
大洲中学校図書館

やっと秋が来た！･･･かな？

皆さんこんにちは。早いもので９月ももう終盤になってしまいました。季節もやっと秋らしくなってきた感じですね。朝晩は、寒さを感じる時もあり、油断をすると風邪をひいてしまいそうです。３年生は「油断大敵」のシーズンを迎える人が徐々に増えてくる時期ですので、注意を怠らない日々を送って下さいね。これからは美味しいものがどんどん増えていきますので、栄養価の高いものを沢山食べて（食べすぎはダメですよ）、身体に抵抗力をいっぱい身につけてくださいね。私事(わたくしごと)で恐縮ですが、私、秋の味覚の中では、栗、梨、葡萄(ぶどう)が大好きで、まあ、今のこの世の中、いつでも食べようと思えば食べられるのですが、やはり旬(しゅん)のものはおいしいなぁ…と感じるんですよね。つい最近だと、葡萄を食べました。ホント、美味しいですよね(*^^)v。 さて、ここからは、私がずっと前から読みたかった本、「父と僕の終わらない歌」の本についてのお話です。

映画よりも先ず本を読みたいと思っていたのですが、なかなか本屋さんに行くことが出来なくて。でも、やっと読むことができました。この作品は、私の個人的な意見としては、親の介護問題が主題と捉(とら)えてはいるのですが、ただそれだけではなく、それ以外の部分にも大切なメッセージが込められていると思いました。地元の人達や幼馴染みとの友情、愛する人とのこと、父親が大好きな音楽のこと。単純に「親の介護問題」という言葉だけでは言い表せないものが感じ取れ、読んだあと、何とも言えない爽快(そうかい)感のようなものが残りました。大洲中のみんなにはまだ「親の介護問題」は早いとは思いますが、でも理解できない内容は含まれていないと思いますので、興味のある人は読んでみてはいかがでしょうか。また、大人の皆さま、肩ひじ張らずにス～ッと読める本ですので、是非お読みになって下さい。図書館にも配架してありますので、ご父兄の方々は、お子様を通じてお借り下さい。

第2回読書記録 優秀作品決定！

夏休み中に行った今年度２回目の「読書記録」作成の回収期間が終了し、各クラス２名の優秀作品が決定しました。優秀作品については職員室と図書館をつなぐ廊下の掲示板に９月末に掲示する予定です。楽しみしていて下さいね。

【新規購入本のお知らせ】＊展示は9月29日(水曜日)を予定

・「C線上のアリア」 湊 かなえ 著 朝日新聞出版

ごみ屋敷となり果てた実家に久しぶりに戻った美佐。家を片づけていく過程で金庫を発見する。そこからひもとかれる、家族にさえ言えなかったなかった叔母(おば)弥生の秘密とは…。朝日新聞連載時から話題となった湊かなえが新たに挑む、先が読めない介護ミステリー。

・「どうしたらいいかわからない時代に僕が中高生に言いたいこと」 内田　樹(たつる) 著　草思社

「どうしたらいいかわからない時代」に皆さんは突入して行くんです。「こうすればうま行く」という過去の成功体験はこれからは使いものになりません。頭を切り換えないといけない。どうしたら自分の潜在能力を開花させることができるか、どうやったら自分のパフォーマンスを最大化できるか。どうやったら自分の頭がもっと良くなるのか。著者が中高生に向けて「正直かつ親切に」語った講演、寄稿、インタビュー特集。

・「嘘と隣人」 芦沢(あしざわ) 央(よう) 著　文藝春秋著

自分の家族や親しい隣人は本当に信用することができるのか？自分がしたことで相手の悲劇を招くことはないのか？日常生活に潜む嘘や悪意によって、相手を窮地(きゅうち)に陥(おちい)らせる結果となってしまう人間関係の歪(ひずみ)を描いた、元刑事・平良(たいら)正太郎の日常生活の中で起きるミステリー集。

・「令和忍法帖(にんぽうちょう)」 青柳(あおやぎ) 碧人(あいと) 著　文藝春秋

普段は普通の人になりすまし、しかしひとたび事件が起これば命をかけて日本を守る。江戸時代、徳川幕府の安定を陰から支えてきた「忍び」たち。明治維新を機にひっそりと姿を消したと思われていたが、実は新政府の警察制度に組み込まれていた。警視庁諸犯罪対策係、通称マルニンに所属する甲賀忍者、白神蝶三郎(しらかみ・ちょうざぶろう) を司令塔に、現代に生きる忍者たちの日常と活躍を描くミステリー短篇集。

・「さみしい夜のページをめくれ」 古賀　史健(ふみたけ) 著　ポプラ社

筆者がはじめて13歳に向けて書き下ろしたベストセラー『さみしい夜にはペンを持て』の第二弾。今回のテーマは「読む」こと。ふだんあまり本を読まない。大人と子供の間で、自分が定まらない。本を読みたいけど、うまく集中できない。学びたいけど、何から学べばいいかわからない。こんな人におすすめの本です。

・「彼の名はウォルター」 エミリー・ロッダ　著　あすなろ書房

遠足に行った生徒たちが、途中バスが故障し近くの屋敷に泊まる事になった。そこには古めかしい１冊の本があった。リアルな挿絵(さしえ)があるおとぎ話のような内容だ。生徒二人がその内容に関心を示し読んでいくと、この物語は昔この屋敷で起こった事件の真相が書かれていた。スリルとサスペンスを兼ね備えた、読みだすと止まらなくなるYA(ヤングアダルタ)文学。

・「リックとあいまいな境界線」 アレックス・ジーノ　著　偕成社

中学に入り、親友のジェフがやたら女の子のことを言いはじめるが、リックはまったく共感できない。恋愛にも興味がわかずとまどっている。そこで、学校の課外クラブ・レインボーズをのぞいてみることにした。レインボーズでは、図書室に「LGBTQ+」関連の本をおいてもらうための資金集めイベントとしてタレントショーをすることになった。しかし、ジェフがショーのポスターをだいなしにしようとする。リックは、ジェフの言動に違和感を感じはじめる。どうして自分はジェフといっしょにいるんだろう。自分の気持ちを祖父に打ち明けることで、リックは自分らしさとは何か、友だちとは何かを考えていく。

紙面の関係上、新規購入本すべての紹介はできませんでした(他に5冊の本があります)。2学期もみんなの期待に応えられるような素敵な本を用意してお待ちしておりま～す (^_^)/~~~